2021.3 no.89

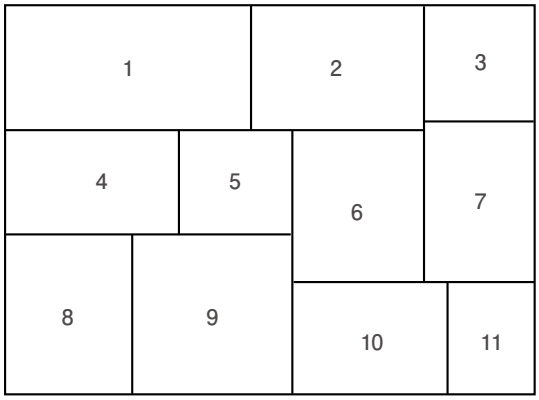
aaca

一般社団法人 日本建築美術工芸協会

第 6 回 街に飛び出す作品展

表紙解説

第６回 街に飛び出す作品展　開催作品



1. **安河内敦子**
   井上勝江版画作品
   想ー６　より
   ステンドグラス
   w101 × h73　２枚組

2. **松田静心**
   種～
   イラストボード
   アクリル画
   パネル作品原画

3. **渡辺雅夫**
   求心力か遠心力か
   ウォルナット・木粉・漆喰
   w91 × h91 × d4

4. **鈴木法明**
   窓（出会う）
   チタン
   w80 × h40 × d39

5. **堤　一彦**
   ON THE EARTH
   御影石（マケット出品）
   w120 × h50 × d90

6. **安部大雅**
   光　音　風
   マケット
   石彫刻作品の為の
   イメージマケット

7. **鈴木法明**
   やすらぎの刻
   チタン
   w60 × h80 × d45

8. **安部大雅**
   揺らめく白
   大理石　ミカゲ石
   w30 × h155 × d20

9. **信ケ原良和**
   未来への方舟
   鉄・ステンレス
   w70 × h150 × d40

10. **平山健雄**
    フランクロイドライト
    へのオマージュ
    イラストボード　水彩
    ステンドグラス原画

11. **堤　一彦**
    YUZURIHA
    大理石
    w40 × h45 × d35

“街なかミュゼ活動”は建築・都市空間に美術・工芸などの造形作品を取り入れ、人間性豊かな環境づくりを推し進める試みで、日本建築美術工芸協会が取り組む活動として展開しています。

「街に飛び出す作品展」に出品された作品の中から建物所有者に提供していただいたスペースを展覧会場に見立て、作家作品を１年間展示し「街なかミュゼ」と位置づけ展開しています。

「第６回街に飛び出す作品展」は 2020 年１月 15 日（水）～１月 21 日（火）建築会館ギャラリー、イベント広場で開催されました。スターツ CAM 株式会社とオーナー様のご協力により「街なかミュゼ」会場５か所の提供をいただき、作品 47 点の応募があり応募作品の中から 22 作品が aaca 推薦委員によりノミネートされ、最終選考で 11 作品が「街なかミュゼ」に推薦されました。

レセプション（令和２年１月 21 日（火）17 時～）では、推薦作家に、岡本賢会長より推薦状が手渡されました。レセプションには 100 名を上回る参加が有り、作品を囲んでにぎやかに交歓されました。

推薦選考された作品は、オーナー様の最終選定をいただき、竣工に合わせて１年間の「街なかミュゼ」として、作家、設計者と共に展覧会委員の立会いのもと、設置位置や設置方法の検討をしながら、設置をします。

（実行委員長　安河内敦子）

CONTENTS

■時代の華一輪
創造（つく）る・保守（まも）る・接点（つなげ）る　中村茂幸　4

■会員活動レポート
初めまして稲垣と申します　稲垣　誠　6
ヴァレリーと美術・建築　田上竜也　7
Link ー現代美術の断面展　巌佐純子　8
2020 年私の展覧会　五十嵐通代　9
二人展　山崎輝子・山﨑和子　10
建築空間のアートを探る aaca 展
中島三枝子・山本　誠・置鮎早智枝・吉野ヨシ子
雨山智子・河村純一郎・渡辺雅子・岩佐敏子　11

■新規入会法人会員のご紹介
レジオン・コンサバティブ株式会社
ポストコロナ時代のギャラリー〜これからの役割　三上紀子　16

■連載 4 回（第 2 回）
地元第一主義 聴竹居倶楽部の活動（2）　松隈　章　18

■母校を訪ねて
東京大学　山下博満　20

■法人会員の設計事務所を訪ねて
株式会社山下設計 part1　広報委員会　22

■法人会員の企業活動を訪ねて
株式会社クマヒラ　広報委員会　24

■表彰委員会だより
第 29 回 AACA 賞受賞者のつどい開催報告　可児才介　26
第 30 回日本建築美術工芸協会賞受賞作品

■事務局だより　28

▶▶ 4

▶▶ 11

▶▶ 16

▶▶ 20

▶▶ 26

時代の華一輪

創造る（つく）・保守る（まも）・接点る（つなげ）

彫刻家
株式会社ビーファクトリー／いりや画廊　代表
日本建築美術工芸協会会員
中村茂幸

1988 年 4 月、足立区入谷の木造の狭い工場で個人アトリエの様な形でビーファクトリーはスタートしました。世の好景気にも恵まれ、多くの仕事を個人で受注制作した事が現在の株式会社ビーファクトリーの始まりです。

現在は足立区鹿浜に本社兼工場を構え、また 2013 年には台東区入谷に画廊を開廊、社員 13 名　スタッフ 7 名が美術系総合制作会社ビーファクトリーを支え、その殆どは東京藝術大学をはじめ、東京造形大学、女子美術大学出身の美術に関してのエキスパート集団です。その業績が認められ、足立区を代表する企業として「足立ブランド」の称号を頂戴しました。

制作会社であり一級建築士事務所でもある弊社では社内教育に重点を置き、設計では高いスキルを必要とする 3D ソフトのソリッドワークスの完全マスターを社員に浸透させております。制作が大変難しいモニュメントなどの造形物に対しても 3D の設計により可能性を大きく広げております。作例としましては、東京タワートップデッキ内装なども 3D ソフトを駆使して完成に漕ぎ着けました。

設計と制作の全スタッフが美大出身者ということもあり、制作に関するきめ細やかで、かつ高い技術の設計・施工に関しては、国内のみならず海外からも高い評価を得ております。

“創造る（つくる）”“保守る（まもる）”“接点る（つなげる）”を弊社の理念とし、企画・デザイン・プロデュース・設計・制作・設置・施工そして管理までを一貫体制で完結させることが特筆すべきことです。

“創造る（つくる）”では 2020 年を代表する大規模プロジェクトとして、新宿東口駅前広場に完成した 「花尾 － Hanao － San －」（作家　松山　智一／設計・構造検討・制作監修・設置・施工担当）、「RONDEAU LA TOUR（ロンド・ラ・トゥール）」銀座セイコーミュージアム（歯車、振り子製作・人形塗装を担当）、そして AACA 賞にも応募させていただいております東新工業㈱いわき四倉工場アートプロジェクト「時空をつなぐ　いわきの光と風」では制作はもとより建築家や多くの作家とのコラボレーションにより施主様はもちろんのことそこで働いておられる皆様方の誇りとなる魅力ある工場造りのために微力ながら貢献できたのでは無いかと思っております。

次に“保守る（まもる）”とは、パブリックアートや歴史的建造物の修復や復元を行い、その姿を後世に残す役割を担う事業です。今までの事例としては、迎賓館中門扉修復など歴史的建造物の他に、イサムノグチ、佐藤忠良、グレコ、ルネ・マグリット、木内克、その他多くの作家の作品修復などがあります。価値のあるパブリックアートをいつまでも綺麗に保つことは日本人の財産を守る事と同じだと考えます。

最後に“接点る（つなげる）”とは、我が国の優秀な作家を開拓し、社会との接点を見いだすことで日本の芸術を高め広めることを目指し、2013 年に彫刻を主とした『いりや画廊』を台東区に開設致しました。

搬入設置など取り扱いの容易でない彫刻を展示する画廊が以前に比べて減少してきたために彫刻家が作品を発表する場を創出したいとの思いがありました。現在、いりや画廊では年間約 25 から 30 の展覧会を開催し、また弊画廊が総合企画を行なっている東京ガーデンテラス紀尾井町　紀尾井タワー 2F オフィスエントランススペースでは年間 6 展をコンスタントに開催することで多くの皆様にお立ち寄りいただいております。

弊画廊で発表の機会のあった作品のご提案をさせていただく

東京タワートップデッキ　特別展望台改修工事　2018
設計／構造検討／制作／設置工事を担当

動画でご覧いただけます

デザイン：KAZ SHIRANE　写真：Nacása&Partners

株式会社ルミネ　新宿駅東口駅前広場　松山智一氏作品
「花尾 － Hanao － San －」2020
設計／構造検討／制作監修／設置工事を担当

東新工業株式会社　いわき四倉工場アートプロジェクト　2020

ことで、開設以来、様々な建築内や個人邸への設置をさせていただいております。

また、2020年は海外アートフェアへも参加しました。コロナ時期でありましたので渡航はできませんでしたが、現地スタッフとオンラインで実行できたのは日本の画廊では唯一です。また参加画廊中で上位の売り上げを達成することができました。質の高い日本彫刻が世界で通用することを証明できた体験であるとともに、日本の彫刻画廊としての役割の重大さを痛感いたしました。東京からオンラインで出展の指示が可能になったのも、偏に現地スタッフのお陰であり、次回に向けた課題も見つけることができる貴重な体験でした。

また画廊事業に若手の育成と発掘があります。現在、彫刻家になろうと夢見る若者は減少しております。材料費、アトリエ費、制作機材費、輸送費など立体作品を制作する費用が作家の負担となり、その上コレクターや彫刻を展示できる画廊も減少しています、それ故に平面へ転向または制作自体をやめてしまう作家が後を絶ちません。

そこで、私は画廊独自の公募展「いりや KOUBO」を開催することにいたしました。40歳以下の若手の作家発掘支援を目的とし、大賞1名、準大賞3名を選出し微力ではありますが賞金と画廊での個展とグループ展および東京ガーデンテラス紀尾井町における発表の場を企画しています。

彫刻家　東京藝術大学名誉教授木戸修氏、建築家 城戸崎博孝氏をはじめとする、彫刻界4名と建築界4名の第一線でご活躍される計8名の方々を審査委員にお迎えし、今年8月に第3回目を終えたばかりです。彫刻に対する愛情をたくさんお持ちの方々のご審査は、コンセプト力　造形力　完成度の三点を総合した合計点数で決定し、公平かつ厳格でありながらも、各点数を受け取った若手作家にとっては、改めて自分の作品を見直す良い機会になったのではないでしょうか。

小さなビーファクトリーを創業し30年余りが経とうとしております。安曇野より上京し、生活費や学費を払うために昼間は働き夜間に予備校に通い4年後に入学した東京藝術大学は大学院含めて7年間在籍しその後も制作することが好きでやめられず東京で起業して以来、その間全てが順風満帆ではなく、廃業の危機がなんども訪れ、それでも制作が好きで日々頑張る。スタッフ人数も増えてまた頑張り、そしてそんなスタッフに支えられてまた頑張る。そんな日々の繰り返しが続いております。

木内克「女神像」　修復　2013

公募 いりや KOUBO
協賛：（株）西武プロパティーズ

第3回 いりや KOUBO 作品展
2020年8/24-8-29 受賞発表

第1回 大賞受賞
小見　拓氏　2016

第2回 大賞受賞
室谷　裕一氏　2018

第3回 大賞受賞
飯島　祐奈氏　2020

展示風景　東京ガーデンテラス紀尾井町（いりや画廊企画展示場）

絹谷　幸太展　2017

和田やよい展　2018

キム・キョンミン展　2019

初めまして 稲垣と申します

ゲンスラー・アンド・アソシエイツ
日本建築美術工芸協会会員
稲垣　誠

私は、実は2年ほど前にゲンスラーというアメリカに本社を置くゲンスラー東京オフィスでのキャリアを始めたばかりである。キャリアをリスタート切ろうと思ったのは、やはり建築にもっと関わりたいという気持ちからである。

私のキャリアは、丹青社という展示・インテリアの設計施工の会社からスタートした。学生時代は、小嶋一浩研究室にて建築設計をみっちり叩き込まれたのだが、諸般の事情もあり（いわゆる就職難で）、建築設計の道へ進まず、丹青社にて博物館の展示デザインやメーカー、ブランドのショールームやオフィスデザインなど、様々な展示・インテリアデザインを行っていた。大学院の小嶋研究室では、様々な建築設計のメソッドを研究していたが、その中でも特に興味があったのはアクティビティ論である。大学院時代の学びが結果的に、より小さなスケールの空間デザインに生かすことができたと思っている。展示・インテリアデザインの世界では、展示品そのものがすでにアートのような作品のものがあり、アーティストとのコラボレーション、まさにデザインとアートを融合した形の空間デザインが当然である。展示・インテリアの世界でデザインをすればするほど、自分には感性の足りなさを痛感し、「そうだ、留学しよう！」と急に思いたち、ラテンの国であり、感性溢れる国イタリアへ1年半の留学をした。今考えてみれば短略的な思考ではあったかもしれないが、結果的に様々な面から見ても実り多い時間を過ごした。今でも答えが出ていないが自分の中で何かが芽生えたのは「アートとデザインとの揺らぐ境界」というものだろうか。そして結果的に感性を身につけることになるであろう「人生の楽しみ方」である。どんな言葉でも表現できないとにかく衝撃な毎日であった。その後、帰国し復職したのだが、その後の自分の作品が変わったのか？というとそんな訳はない。しかし、クリエイティビティを発揮する場所は、会社の仕事を通してだけではなく、プライベートでも出来る！むしろ挑戦してみよう！ということで、Salone del Mobile、ミラノサローネの若手登竜門へ応募し、三回ほど出展した。会社でのデザイン、プライベートでのデザインという二面性をもったデザイン展開は、お互いの活動を客観的に見ることができ、また、お互いの活動では味わうことができない体験だったと思う。そんなこんなで40歳を過ぎ、「はて、今後の自分はいかに？」と考えはじめた矢先の恩師の死去という連絡を受けた。その連絡はショックだった。でもそのショックで再び自分の中で芽生えたのは、建築設計に関わりたい、建築設計をしたいという気持ちであった。そこで思い立ち、リスタートしたのが2年前である。

結局のところ、活動の場所を変えただけで、特に普段の生活に変化はない。英語の使うことが圧倒的に増えたかな？程度である。ゲンスラーではワークプレイスデザイン、ホスピタリティデザイン、アーキテクチャーデザイン（念願叶う）など幅広く携わっている。特にゲンスラーでの仕事の面白みは、領域を決めずにデザインが行うことである。建築のデザインをするだけではなく、その建築におけるインテリアやワークプレイスの提案、そしてアーティストとのコラボレーション、空間へ実装するデジタルアートなど、総合デザイン・プロデュースしているということが、今の仕事である。領域なんぞ限定せず、幅広くクリエイティブに仕事していきたい、と思いつつ、コロナに負けぬよう日々精進する毎日である。

2007 Salone del Mobile, Satellite, Italy　©AUN2H4

2007 Lighting Objet, Tokyo　©AUN2H4

2010 SHELF 展 , Tokyo　©Tanseisha Co., Ltd.

©Tanseisha Co., Ltd.

2012 Salone Del Mobile, Satellite, Italy　©AUN2H4

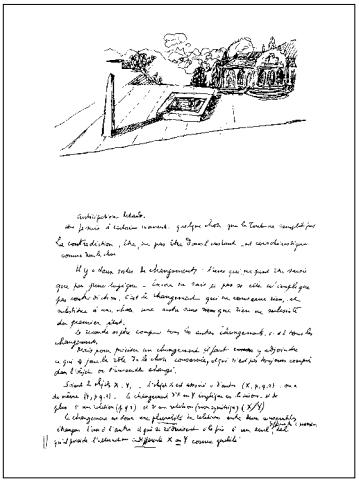
ヴァレリーと美術・建築

学習院大学教授
日本建築美術工芸協会会員
田上竜也

私の専門は、フランスの近現代文学と文化芸術ですが、主にポール・ヴァレリーという作家を中心に研究してきました。ヴァレリーは生前、20世紀最大の知性と讃えられた人物であり、小林秀雄はじめ日本の多くの知識人に影響を与えた存在でもあります。彼は『若きパルク』『魅惑』といった詩集や『ヴァリエテ』などにまとめられた批評文で知られる詩人・批評家ですが、その真価はそうした公刊作品よりもむしろ、生前自分のためにのみ日々書き続け、死後公開された膨大な『カイエ』にあります。これは夢や注意力、感性、記憶、宗教心や性愛などさまざまなテーマを扱った断章や、小散文詩、さらには計算式などの入り混じったユニークなテクストですが、そのなかには人物や風景、建築物、幾何学図形を描いた少なからぬデッサンやクロッキー、水彩画が含まれています。ヴァレリーはもともとマラルメの高弟たる詩人として出発したのですが、師の文学的模倣から抜け出せないことによる劣等感や、とある婦人への一方的な恋愛感情の激発に苦しみ、20代初めに詩作を一旦放棄します。その代わりに取り組んだのが、数学や物理学モデルによって人間心理を抽象的に分析することを目的としたノート『カイエ』であり、以後20年以上にわたる「沈黙期」を通じて、さらに『若きパルク』によって文学界に復帰してからも、夜明けの日課として生涯書き続けられることになります。ヴァレリーは青年時代にレオナルド・ダ・ヴィンチの公刊された手稿を読んで大きな影響を受けました。初期の代表作『レオナルド・ダ・ヴィンチの方法序説』は、彼のダ・ヴィンチへの偏愛を聞きつけた出版元からの依頼原稿でしたが、現実のルネサンス芸術家とはまったく関わりなく、最新の物理学的知見によってダ・ヴィンチの想像界を再構成した、不可思議な作品となりました。『カイエ』もまさにダ・ヴィンチの手稿を範としながら、文学と科学、芸術といったジャンルを越境した他に類例を見ないテクストとなっています。下にあるのは『カイエ』から採られた画像ですが、抽象と具象、思索と表象との関係性への考察を誘う、ひとつの総合芸術と言えるものでしょう。ヴァレリーはドガと親しく、またベルト・モリゾとは妻を通じて姻戚関係にあったことから、印象派周辺の画家についての美術評論をいくつも著しています。また建築については、有名なプラトン風対話篇『エウパリノスあるいは建築家』の中で、純粋審美的装置としての「歌う建築」という概念を提示し、この作品はフランス人建築家たちにとっての必読書となっています。

私はこれまでの研究生活を通じて、ヴァレリーの『カイエ』に記された思索を同時代の科学思潮の文脈に置き直しつつ、彼の想像界を再構成する作業を進めてきました。現在は対象を広げ、文学や美術、建築、といった境界を超えた空間的想像力に関しての考究を進めています。特に関心を寄せているのは、18世紀末フランス革命期の建築家ジャン＝ジャック・ルクーです。ルクーはブレやルドゥーと並ぶ幻視の建築家で、実作はほとんどなくその奇怪な建築計画案で知られています。近年伝記的研究が進み、パリのプティ・パレで本格的な回顧展が開かれるなど注目されており、彼の残した設計図面は奔放な詩的想像力の産物として評価がいや増していますが、資質としてはむしろ文学者に近いとも評されています。ルクーに限らず、さまざまな創作者におけるテクストとイマージュの相互作用の分析に取り組んでいるところです。

『カイエ』より①



『カイエ』より②

Link －現代美術の断面展
コロナ禍でのアート・国際交流としての個展

美術家
日本美術家連盟会員
日本建築美術工芸協会会員
巌佐純子

この度は、海外個展「Thailand National Mahasarakham University Art Museum」の公演名義使用許可をいただきありがとうございました。1年前は全く予期もしていなかったCOVIDO19により延期することも考えましたが、全く先の事が見えず予定通り開催しました。ただ両国の外務省が渡航を許可しておらず、全くのオンラインでの開催となりました。

主な出品作品は、自ら制作したマチエールを活かした紙のレリーフで、古代人が眠る大地の暖かさと力強いエネルギーを表現しています。また、ピースに分かれた色面の作品は－色・形などは個々に微妙に違っていても美しく調和し、お互いに響きあう－私が理想する社会を表しています。この様な世の中になると予想だにせず8年ほど前から“何処にいくのか？”“何処から来たのか？”等をテーマに制作してきました。

今、私たちは国と国、人と人が行き来が不自由になっていますがアートが人を繋ぎ、自然や社会など全てがリンクし、うまく共生していく事が必要です。長らくこのLINKを個展のタイトルにしています。

Link － A slice of contemporary arts.というタイトルでプログラムを3部構成にいたしました。

1部：芸術学部長始め4名の先生方の挨拶などがありOpening Ceremonyとしてテーピカット。そして作品紹介とその作品の背景に対する思いなどをオンライン、ビデオでお話しました。

2部：Mshasarakham University Art Museumの文化学科の学生との対話Symposium － talking across the cultural border MSUのスローガンA Classroom“Where Education、Culture and Community meet.“Cultural salon”楽しみながら文化を学ぼうという事で、まず学生、画像によるプレゼンターの紙文化の調査発表がありその後、活発な作品に対する質疑応答の場となりました。

3部：ワークショップは現地に自生する50から60cmもある葉に興味を持ち、それを使用したく芸術学部の先生のお手伝いをいただき、日本・タイが同心円で周りを自然が囲っているという構想で進められました。たくさんの葉のスタンプを大勢の学生さんたちの丁寧な仕事により、美しく丸くてシンボリックな作品になりました。

会場へは遠くの他の県やイサーンの文化村の方々も来てくださり、会期も1週間程延ばしてくださいました。インターネットを通しての交流でありましたが、皆さん親切で暖かくとても楽しく大変貴重な時間でした。

ポスター制作から始まり、会場設営、プログラム、材料の買い出し、通訳等、コーディネーターの方を始め、先生方、多くの学生さんなど現地の方々のご協力により立派な展覧会にしていただき無事終えることができ感謝しています。

“message from the earth-view9”
160 × 160 × 2cm

私達は何処へ
行くのか－光－
45.3 × 38cm

私達は何処へ
行くのか－海－
41 × 31cm

私達は何処へ
行くのか－雲－
60 × 45cm

“Grid..memory”65 × 80 × 8cm

巌佐純子、Landscape － the Earth 1 －、紙・岩絵具・金泥・墨、200 × 450cm

“はなのいろは”120 × 700 × 2cm

2020 年私の展覧会

新制作協会会員
日本建築美術工芸協会会員
五十嵐通代

2020 年は作品を発信することが大変な年でした。

コロナの感染予防のため美術館の休館（残念なことに aaca 会員の澄川喜一氏の横浜美術館での個展も数日で終了）、ギャラリー休廊、公募展などの中止、私の所属している新制作協会も展覧会が中止になりました。

8 月末コロナの感染状況がやや下火になった頃、aaca の会員で、建築家でもあり、神保町の artgallery & Legion を主催されている三上紀子氏より二人展の企画を頂きました。展覧会のコンセプトは『剛と柔』。柔らかそうに見えて硬いもの、堅そうに見えて柔らかなもの、軽そうに見えて重いもの、重そうに見えて軽いもの、これらの 2 つの対比をテーマにしたいとの事でした。

お相手の平石裕氏は長年、鉄の造形で活躍され、国内はもとより海外にもその作品が設置されている方です。平石氏より、ご自分は赤の作品なので、私の作品は白でとの希望があり、お互いに二人展は初めての経験でしたが、二人の作家がギャラリー全体を『一つの空間作品』となるように展示出来た事は、平石氏より学べた良い経験になりました。

10 月 artgallery & Legion 開催“Floating”平石 裕＋五十嵐通代展においては来廊された方が平石氏の作品を「紙作品ですか？」とか「フェルトですか？」との問いに「鉄です。」と言うと、びっくりされ、又私の作品を「セラミックですか？」と問われ「絹織物です。」と言うと驚かれました。三上氏の狙いに添えたのではないでしょうか。この頃は東京のコロナの感染者数が 100 人位の時で来廊される方も想像より多く、個展の開催も徐々に増えてきた頃で、画廊巡りをしている方も何人か来てくださりアートがやっと楽しめるという感じでした。

11 月末から 12 月初めにかけて京都の四条河原町にある「ギャラリーギャラリー」で個展を開催しました。国内ではコロナ感染が増え始め GoTo トラベルの新たな申し込みの中止が話題になってきた頃です。

個展のテーマは『繁』です。地球環境の変化で勢力を伸ばして巨大化していくもの、その影で消えて行くもの、その事に対する恐れの気持ちを表現してみました。今、世界中を混乱させている感染症コロナも、もしかしたらこのような状況が関係しているのかもしれません。

この頃の京都市内のコロナ感染者は 10 人ぐらいで、お隣の大阪が凄い勢いで増えている時期で、地元の人も『京都がコロナ少ないの何でやろ？』と不思議に思っていた頃でした。

「ギャラリーギャラリー」の川嶋啓子氏は海外のテキスタイル作家たちとのネットワークを持っていらっしゃる方で、前回 2018 年に個展をした時は、アメリカのテキスタイル専攻の大学生のツアー、スペインの作家グループ、ニュージーランドの研究者、スエーデンの作家など海外の方々がほぼ毎日見えていました。もちろん日本の方も多く、友人たちも東京から見に来て下さいました。町は人で溢れ四条大橋を渡るのも人をかき分け、いくつもの言語が耳に入ってきました。本当に賑やかな個展でしたが、それと比べると 2020 年の個展に足を運んでくださる方は少なかったのですが、テキスタイル関係の方がほとんどで、美大の先生、アーティスト、美大生、美術館の学芸員の方、情報関係の方、ギャラリー巡りの方々にご覧頂き、貴重なご意見を聴くことができました。

静かな個展でしたが有意義なものになりました。

今回、展覧会を開催出来た事に心より感謝したいと思います。

また次回は皆様が集える事を願っております。

二人展

皮革工芸
日展会員
現代工芸美術家協会評議員
日本建築美術工芸協会会員
山崎輝子

染色造形
日展会友
現代工芸美術家協会評議員
日本建築美術工芸協会会員
山﨑和子

先般、秋深まる銀座８丁目の（GALLERY アートフォーソート）にて、二人展を開催しました。(2020.11/19 ～ 11/28)

染色作家の山﨑和子さんと革工芸の山崎輝子は日展と現代工芸展で出会い、そして aaca でのお付き合いのご縁が今日に至りました。

両頭文字を冠して「Y & Y」展とし、加えてアーチスト同志の会員、松田静心氏や松本治子さんの応援も頂きました。

山﨑和子さんは絵画と工芸の狭間で時と空間をテーマに、山崎は革のマチエールにこだわり、それぞれの造形表現を平面やレリーフにして発表をしています。

生憎コロナの蔓延最中でしたが、皆さまの暖かい応援を頂き、お陰様で無事盛会に終わり感謝致しております。有難うございました。

山崎輝子　記

「建築空間のアートを探る aaca 展」に参加して

「建築空間のアートを探る aaca 展」の開催

画廊るたん主宰
日本建築美術工芸協会会員　中島三枝子

画廊るたんでは 2002 年―文化庁派遣作家シリーズ「安河内敦子ドイツ帰国報告展」で安河内先生に初めての aaca 関連の展覧会を開催していただきました。その後 2016 年―「座談会のためのチャリテイー展・新しい歩み」で画廊を提供し、調査研究委員会と情報文化部会主催の開催で東日本大震災の復興にも寄与しました。長い調査研究委員会の活動からパブリックアートの理論的側面の調査研究、シンポジュウムに携わり、建築空間、都市空間におけるアートの在り方、意義を学ぶこともできました。　また、画廊では協会の活動に関心を持つアーティストに声をかけ画壇との関係を保ちながら協会の趣旨でもある芸術的環境の創造に関する催事や見学会を紹介しています。

この度、画廊るたんで開催しました「建築空間のアートを探る aaca 展」（2020 年 10 月 12 日～ 17 日）では、協会ならではの多岐にわたるジャンルのアーティストの方々に呼びかけ、コロナ禍で作品発表や制作活動がままならない折、ご協力いただき個性あふれる作品展を開催することが出来ました。

「コロナ禍」

造形作家
日本建築美術工芸協会会員　山本　誠

8 月だかに、画廊るたんの中島さんから電話があり、「コロナでいろいろ大変なのよ」とのこと。それなら、役に立つならと、友達にも声をかけたのですがやはりダメだと言うことになり、どうしたもんかと思っていたところ、中島さんのご苦労の結果？aaca の仲間たちとのこのようなグループ展に相成りました。

新型コロナは日本社会はもちろんのこと、世界にも甚大な影響を与えました。私自身は後期高齢者の仲間でありながら、幸い健康であるので、余り気にせず過ごしています。また、普段からコロナ禍の生活をしてるようなもので、上昇志向も無く気ままに生きているのですが、若い人やエッセンシャルワーカーの人は大変でしょう。

しかし地球規模で考えると、いままでのような発展は望めないのです。地球の平均気温が産業革命以来、たった 1.1℃上がっただけで、現在これほどの自然災害か起こっています。日本での台風被害はもちろん、アメリカやオーストラリアの山火事、ツンドラの溶解など世界規模での災害が現実になって来ています。一方、社会的には貧富の差が激しくなっています。世界のトップ 62 人の大富豪が全世界 36 億人の半分の富を握っている現実。こんなことが長く続く訳はありません。私は常々思っています。この地球に生きていくなら、シェアしかありません。即ち、コミュニティを大切にし、仲間を大切にした地域分散型社会が重視されることでしょう。将棋の世界でも AI の時代と言われながら、藤井聡太さんが出てくるのです。AI やデジタルに抵抗し、利用し、ローカルな社会にしましょう。市民中心の真の民主主義の時代にしましょう。

幸い我々には先輩がいます。鴨長明です。失意の先に行き着いたのが「方丈の庵」です。昔から言います「立って半畳、寝て一畳」。この情報の飛び交う時代に禅を極めようとする人もいるのですよ。人間っていつの時代も変わりませんよね。人間って本当に不思議です。

作品をつくる、という意味で私は 20 代以来進歩していません。これからどうするのでしょうか。私にも分かりません。「過ぎたるは猶及ばざるが如し」最近気になる言葉です。きっとこのままのんびりやるのでしょう。

とにかく、結果的に中島さんの一言に乗って、良かったと思います。歳も歳だしそろそろ aaca ともおさらばしようかと考えていたのですが、差し当たり 1 年は伸ばすことにしました。このように aaca の新しい友人と一緒にグループ展が出来たことだし、なかなか会えない懐かしい人と久しぶりに会えたのですから。

作品名「干支マスコット・錫の箸置き」

’幼児期に遭遇した不思議’

アーチスト
日本建築美術工芸協会会員　**置鮎早智枝**

着物デザイナーの父が持つ面相（毛筆）の先から描き出される一本の線、動き出すと線が一面に百花繚乱と化した。

線の不思議でした。 一本の線が、草花から森林にも、平面から立体的にも、微生物から宇宙まで森羅万象を表現出来る。線自体は存在せず物を介して形を成し、おそらく人類誕生以降、描く事から始まり言葉の文字となり、未来永劫必要不可欠なツールだと思う。

かたや、自然界に見る線や輪郭線は人間の手に及ばない美しさを現している。草木など植物の曲線、自己相似性を持つ線、砂漠の風紋、風雨の浸食作用が創る地表の造形など、挙げればきりがなく、ただ魅了される。

原体験の存在は堅く、15年ほど前から毛筆を使った墨字の表現に入りました。筆の線は、自からの表情を持ち、操ることもできず本当に難しい。風の様にサラサラと、子供が遊ぶようなコロコロと丸や四角い’生の線’を・・・色々求め試行錯誤は続くが、苦しくも楽しい世界観です。文字は主に季節を詠んだ古典の和歌や俳句です。しかし書き進むと「歌」はいつの間にか描線のジャズやロックのリズムになり、オペラにもなる。和紙に書いた文字が重なり合って絵に変化するのが面白く制作意欲が増してくる。

コロナ禍で移動規制が始まった4月、私は京都郊外の姉宅に2ヶ月半止まることになった。そこは京都と奈良の間に位置し、源流の三重県から大阪湾に流れ込む木津川沿の京田辺市、川に沿うよう左右に山が連なる細長い盆地です。この京田辺市から隣接の木津市には国宝や重要文化財を有す12の古刹が遠近に点在する。一休さんで馴染みの一休寺、日本で2番目に古い十一面観音菩薩が祀られた観音寺、聖徳太子立像や十一面千手千眼観音菩薩像を祀る壽法寺、やや深山には聖徳太子建立の小さな神童寺。それに神功皇后が酒壷を安置したと言われる酒屋神社。殆どが傾斜地や山中に有りしかも閉鎖で人影もない、そんな神社仏閣を自転車で駆け巡りました。季節は春爛漫、小川には花筏、ピンクに染まったレンゲ畑、風と戯れる萌黄の葉、水辺で白鷺が鴨と遊び、池の鯉は大きな口をパクパク、美味しい筍産地’山城’の里山に伸びる筍が日ごと若竹色になる…そんな日々が言葉となり線になり「みちくさ」の絵になりました。

作品名　「みちくさ」
キャンバス（3枚綴り）W195.6cm × H53cm　（1枚サイズ 65.2 × 53）
技法　コラージュ、和紙、墨

建築空間のアートを探る aaca 作家展に参加して
ー都市の巣ごもり　建築空間のアートを探るー

彫刻家
日本建築美術工芸協会会員　**吉野ヨシ子**

コロナの中で、自宅にいることが多くなった3月から、自宅の小さなアトリエで、ラジオを聴く毎日でした。

テレビの朝ドラエールは、福島生まれの私にとってはとても興味深いものでした。福島の浜通り、中通り、会津地方の景色が歌とともに頭によぎってきました。

素敵な音楽の主題歌を聞いているうち、芽生えてきた立体の形でした。それを、どんな素材で表現しようかと考えました。普段でしたら、ステンレス、鉄の作品が主なのですが銅板も、腐食したらよい色合いが出できます。それは、時間が経過しないとよい色合いにはなりません。

古関裕而は、福島市生まれ戦前戦後ともに活躍され、とても身近な音楽も作曲された方です。そのような、歴史を感じられる作品になればと思い素材を銅板にいたしました。まだ今回展示したのは腐食していませんが、腐食が楽しみです。

素材の銅板が薄いために、溶接が難しく、溶接方法を変えてみました。

金属作品を作り始めて20年経ちました。これを機会に素材いろいろ考えながら、作品を仕上げるのも面白いものです。基本は金属ですが、他の素材にも自分なりに挑戦していきたいと思います。

なかなか発表の場がなかった今年でしたが、ゆっくりと作品に向き合えたのも確かでした。

ほかには、平面の作品にも取り組んでおります。夏を中心に福島の尾瀬入り口の檜枝岐村に住んでいます。6月初めフキノトウから始まり水芭蕉・ニッコウキスゲ・つつじ・コオニユリなど尾瀬の花々を描いております。それらを私なりの表現方法で尾瀬の花と向き合いながら描いております。尾瀬の夏は、短くその短い間に次々に咲きます。

そして9月紅葉が始まり、10月末には雪が降り始めます。

まだまだ、未熟の作品ばかりですが、楽しみながら作っていけたらと思います。展覧会に参加させていただきありがとうございました。

作品名「エール」

「制作すること」と「発表すること」

テキスタイル造形作家
新制作協会会員
日本建築美術工芸協会会員　雨山智子

昨年３月初め、新型コロナウイルス感染防止のため予定していたグループ展を急遽公開中止にすることとした。その際に制作していた作品のひとつが、今回出品したダークピンク系の作品「circle Ⅰ」である。

３月からの長い期間､「制作すること」と「発表すること」について考えてきた。そのような中で、画廊るたんからこの展覧会にお誘いいただき、参加することになったのである。毎年９月に国立新美術館で開催する新制作展も中止になり、実作品を展示する展覧会は年内２度目だった。またaacaの会員の方々と展覧会をするのも久しぶりのことであり、出品メンバーとは初対面同様だったが、搬入時から親しくお話をさせていただき、お一人おひとりの作品にゆっくりと接することができた。遠方の方やご都合でお目にかかれなかった方もいらしたが、ご本人がいらっしゃらなくても作品が存在していることの意味をいつも以上に感じ取ることができた機会だったように思う。私も、自身の仕事や家族の職業の関係で最低限の外出にとどめているため、足を運んでくださった方々に失礼してしまったが、作品には会っていただくことができたと考えて、この展覧会が行われたことや、大変な時期に労をとってくださった画廊に感謝している。

私は、１年半ほど前からテキスタイルの作品のベースの部分に紙を使用し始めた。それまでも、木製パネルにプリントした布を張る時にキルティング綿で画面にふくらみをもたせることなどをしてきたが、布を紙に貼ってから形を作っていくことを試したら、それまでよりシャープな表現ができ、カッターナイフを多用した作業も工作のようで楽しくなり、しばらく続けてみたいと思っていた次第である。そこで、画廊の空間にちょうど良いサイズと思われる750mm角の「Circle Ⅰ」をチョイスし、シリーズとして同サイズのグリーン系の「Circle Ⅱ」を制作した。円の部分と周囲の背景やフレームのように見える部分は、布を貼った紙を3mmほど奥行きの違いをつけて画面上に重ねているので、思わぬ陰影も生まれてくる。紙を使用したこの技法は、制作の方向としてはまだまだ発展させられる可能性があるのではないかと考えている。しかし、公共的な場所へのアートワークとしては、その3mmの隙間に埃が溜まってきたら長い間の展示に耐えられるのかどうか、個人でも手入れが大変なのではないかという疑問もあり、今回の「建築空間のアート」というテーマには少々配慮が足りなかったかもしれないと思っている。

今年の３月にも展覧会を予定しているが、先が見通せない状況の中､「制作すること」と「発表すること」については、これからも問いかけ続けていかなければならない課題だろうと考える。

作品名　「Circle　Ⅰ」「circle　Ⅱ」
作品サイズ　750 × 750 × 35mm
素材・技法　布、紙、インクジェット出力、捺染

時を求めて

画家
日本建築美術工芸協会会員　河村純一郎

岩国の錦帯橋を流れる錦川の上流、中国山脈のふもと、平家の落人伝説のたくさんある小さな町で幼年期を過ごしました。その頃の体験がベースとなって、僕の中に息づいています。夏の暑さや蝉の声、冬のしんしんとした寒さを、知らず知らずのうちにその頃と比べています。近所には、鍛冶屋、竹細工、馬蹄製造、砥石屋などが軒を連ね、それらの職人さんの手仕事を毎日眺めて、わくわくしていました。あの頃の郷愁、望郷と行った想いが常に僕の創るものの根底にあるような気がします。

技法はミックストメディアと言われるジャンルです。油と水が混ざった（エマルジョン）木材や、日本画の顔料も使っています。接着剤の進歩によって様々な技法が生まれ、第２の印象派を創り上げたとも言われています。この技法をずいぶん前から取り入れています。耐久性に優れ、最近では重要文化財の修復にも似たようなものが使われているそうです。焼き物や陶器に興味があり、特にその肌合いに魅かれます。そんなマチェールの中に、人もどきの心象人物を描きたい思っていました。人と人形、男と女、虚と実、絵画とデザインといった中のニュートラル、中庸の世界観が気に入っています。旅をして、メモリー代わりのスケッチの中の人物は、心象の中いつの間にか自画像めき、遠い記憶とともに変遷し、少年時代の空気を帯びる。「遠い日」のコンセプトです。

花、特に山野草を描きたいとずっと思っていました。と同時に、険しいもの厳しいものも追求し、コンテストに出品した日々もありました。が、結局優しいものの方が好き、個展中心にやっていきたいと方向性が決まりました。そんな気持ちになれた時、花を描き始めました。ヤマシャクなど、山野草を何種類か庭に育てています。花の咲く時期は手元に置きたいので、アトリエに生けますが、実際に見て描くことはしません。リアリティーを追ってしまわないように、僕らしく花が描けるといいなと思います。

毎日同じことを繰り返し、時間と共に堆積して行くものの中からゆっりと変化が生まれる。僕流の言葉で　”偉大なるマンネリズム”と呼んでいます。マンネリ化したものの中から浮き彫りになる新鮮。例えば、いつも顔を突き合わせている人の素敵を再発見する。そんな、僕と絵の関係を大切にしています。

これからも、慣れることなく描き続けていきたいです。

作品名「あの日のこと」
技法　ミクストメディア（MB）

「時」を見つめて

画家
モダンアート協会会員
日本建築美術工芸協会会員　渡辺雅子

私はこれまで時の流れや境界、裂け目などをモチーフとして描いてきた。

コロナウィルスのために、世界中の多くの人々が命を落とした。街はすっかり活力をなくし、ついにはストップしてしまう事態にもなった。人々は付き合い自体から遠ざかり、遠出もしなくなった。

付き合いを奪われた私の友人たちの中には「終い支度」と称して不要な家財の片づけに取り組み始め、いざというときの準備をしているようだった。

ロックダウン以前にウィルスは易々と国境を越え、今に至っている。ウィルスのもたらす災厄は無数の悲しみと嘆きをもたらした。

その淡々とした「時の流れ」は、その瞬間の時の境界に衝突をもたらす。

地上に住む生き物たちは何億年もの間、受け継がれてきた生命体としてそこにいる。消滅すれば、そこでストップする。

その一個体としての私は、絵を描くことを仕事としてきた。戦後生まれの団塊の世代は、常に競争に晒され、狭い教室に詰め込まれ、時間ごとの教室移動の記憶も鮮やかだ。同時に「数は力」であり困難に直面してもエネルギッシュにそれを解決してきたこともまた事実だ。

その世代も近年鬼籍に入る方も増え、いただく訃報も増えた。

絵描きとして沢山の作品を残しても、美術館ではたとえ有名であっても１～２点ぐらいしか収容していただけない。残された家族は、私蔵できるものは小品に限られ、他は処分の憂き目に会うばかりだ。そんな場面に出会うと胸が痛む。

東京では変わらず建設ラッシュが続いて多くのビルと、そこには多くの壁面が生まれているように見える。

もちろん人の心をワシヅカミするほどの絵は一握りではあろう。

病院や公共施設にも美術作品は随分展示されてきているが、もっともっと身近に作品が飾られていてもよいではないか。花を飾るように美術作品が身近なところに掲げられたら嬉しい。

これからの日本社会は人口減少へ向かうという。むしろこれを好機として、生活の中身・水準に眼を向けることはできないか。限られた資源・人材を生活の豊かさに振り分けることはできないか。人口の母数が減少するのであれば逆に有利に働くのではなかろうか。街の中に美術作品が広がり、絵のそばに私たちがいる。そんな光景を私は夢想している。

作品名「時の残滓５」

aaca 作家７人展レポート

モダンアート協会会員
日本建築美術工芸協会会員　岩佐敏子

コンセプト　内在する自己の世界（空間）と、それを囲む世界(空間)とのコラボレーションを追ってみた。マチエール的に細い木片を画布に貼った。木片による線自体の存在の他に線が面を仕切ることで新たな面（空間）を生み出す。筆（線描）の代わりに木片を使ったのは、木片はフリーハンドで描いた線とは違い、制約はあるが、実直で、ぬくもりを感じる。(上からシルバー色を塗ったのでぬくもり感は少ないが)。

画歴　モダンアート協会会員　個展、グループ展、多数回
作品タイトル　「コラボレーション」、2273cm × 162cm
使用材　画布、アアクリル絵具、木片

新規入会法人会員のご紹介

ポストコロナ時代のギャラリー ～これからの役割

レジオン・コンサバティブ（株）代表取締役
artgallery &Legion 主宰
建築家
日本建築美術工芸協会会員
三上紀子

神田神保町にアートギャラリーを構えて早や二年と半年が過ぎた。

ギャラリー運営に関しては全くの素人だった自分が曲がりなりにもアートギャラリーをこれまで続けてこられたのは、ひとえに周囲の方々の温かいご指導とご支援の賜であると心から感謝している。

これまで29回の展覧会を実施した。個展、企画展、シンポジウム、フォーラムなどスタイルは様々である。いずれも手探りで手作りの企画で、玄人の方からみると稚拙な様相を呈していたかもしれないが、どれも何らかのメッセージを含んだものとするように心掛けてきた。

当初は漠然と、“建築”と“現代アート”をテーマとしていたが、大事にしていたことがひとつある。それは、＜空間＞と＜作品＞との呼応だ。平面で立体でも「空間を感じる」作品を展示したいと思った。

「空間を感じる」とは、「その場に佇む」という意味合いがある。私がパブリックアートを好きなのは、作品のその場に佇む様子なのだと、最近認識するようになった。

実は大昔、大学3年の春休みに先輩が勤める都市計画のコンサル事務所で1か月半アルバイトをした経験がある。某県からの依頼で、駅前のパブリックアートのコンペを実施するための要項を作る仕事だった。先輩とその上司である所長さんに付いて、日本中の彫刻のあるまちづくりを調査した。北は仙台から南は九州まで視察のための出張にも同行した。まだパブリックアートという言葉が一般的ではなかった頃だったと思う。ある都市では“風の塔”の制作過程について市役所の都市デザイン室の担当者を訪ねたりもした。

さて、昨年2020年はギャラリーでもいろんなことがあった。2月に入って急に様子が変わった。新型コロナの影響だ。ちょうど2月に鉄の作家さんの彫刻展をしている時だった。中国や欧州で流行し始めた新型コロナウイルスの余波が日本にも及び、不要不急の外出が制限されるようになった。4月には緊急事態宣言も発動され、当ギャラリーもしばらく休業状態を強いられた。

“不要不急”という、これまでなじみのなかった言葉に戸惑いながらも、ギャラリーを運営する者としてどのような対応をとるべきなのか、その後も刻々と変わる社会情勢の中で毎日国内外のニュースを聞き、様子を探りながら次の行動を考える日々が続いた。3－5月に予定していた展覧会は中止し、その後の予定も次の再開が確定できないまま延期した。神保町の街も一時は誰も通りを歩いていない情景となった。「アートは果たして“不要不急”な営みなのか、否か。」そんな問いを正面から突き付けられているような気がした。

そんな中、心にのこるメッセージが海外ニュースから届いた。それはドイツの文化相による「我々にとってアーティストは必要不可欠であるだけでなく生命維持に必要なのだ。」という趣旨の演説であった。これまでに誰も経験したことがない状況の中で先の見えない不安を生き抜くためには、身体の健康に加えて心や精神面での健康を保つことが大切であるとのメッセージであった。この演説を聞いて迷いは一気に吹っ飛んだ。「できる状況になったら一番に展覧会を再開する！」。勇気をもらった気がした。

7月に開設2周年を記念して計画していた初の海外アーティストによる展覧会は作家の来日不可の状況より断念す

artgallery &Legion では、空間と作品が呼応する展覧会を開いてきた

6月、緊急事態宣言明けに再開した最初の展覧会の初日。作家さんを囲んで集合写真を撮った

ギャラリーの外観

ることにはなったが、国内アーティストの展覧会の準備に邁進した。

折しも昨年の11月にサッカー界の寵児マラドーナ氏が亡くなった際、アルゼンチンの多くの国民は哀しみ、「彼は政治では与えてくれない“幸せ”を我々に与えてくれた。」と追悼したが、まさにこれなのだ。

ギャラリーは、アート作品を飾り、売るだけが役割ではない。人とアートをつなぎ、まちとアートをつなぐ。そして暮らしとアートをつなぎ、なによりもアートという媒介によって人と人をつなぐ。

当ギャラリーには様々な人々が訪れる。各界の第一線でプロとして活躍している方々も多い。ゆえに多様な話題が飛び交い、新しい交流が生まれる。

コロナの自粛期間中、閉じこもってばかりではいけないと、Webを使って何かできないかと、仲間とFacebook上で「神保町アートネットワーク」というグループを立ち上げた。はじめは身内だけの数十人のメンバーであったが、そのうちどんどん参加メンバーが増え、関東のみならず関西や日本全国からの参加も加わり、今では2500人のネットワークに成長した。Zoomでのアート懇談会、時空を超えた熱いアート議論。いずれも初めての経験だったが、どれも私たちには必要なことだったと今思う。

そして8月。神保町さくら通りにあるレトロビルの解体の知らせが舞い込む。街の角地に立つ昭和4年築の瀟洒な建物、関東大震災後の復興建築でまちのランドマークにもなっている建築である。新しい所有者により新しいビルに建て替えるために解体されるという。何か保存・活用の余地はないのだろうか。早速建築家の先輩と連名で千代田区議会と所有者へ保存活用の要望書を提出した。建物の価値をどう伝えるか？所有者との話し合い、区への働きかけ。Facebookで当ビルの解体を知ったアーティスト達と「歴史的建築物は私達の財産であり、まちのアートである」を合言葉にギャラリーを使って「さくら通りと神保町の歴史と建築を考える」と銘うち、パネル展示とフォーラムを開催した。結局、時間が足りず、解体を免れることはできなかったが、所有者とコミュニケーションを続けた結果、最後は内部見学を許可していただき、建物の実測とコンクリート躯体の分析等による建築学的記録という形での保存に繋ぐことができた。10年先に残したい建物とは…？日頃からの発信、アートとしての都市の次世代への継承方法など、いろいろな課題をもらった出来事であった。

ギャラリーは人々に何を届けることができるのか？社会にどのように貢献できるのか？それを模索し確信できた2020年であったと、今振り返って思う。

アートの役割を社会へ発信する…。アートが持つ“感性”をくらしづくりやまちづくりに生かす。アートが社会へ貢献できる“しくみづくり”をもっともっと考えていく。

全ての人にアートが身近になるように、アートの価値と新しい意味を社会に伝えたい。アートと市民をつなげる「役目」を担い、真のアートのパブリック化を目指してこれからもできる限り続けていきたい。

これからのギャラリーとしての役割は忙しい。

多様な人々が集う。ギャラリーでのクロストークイベント

昭和4年築の旧相互無尽本社ビル。ギャラリーのある神保町さくら通りのランドマークでもあった

連載４回（第２回）

地元第一主義 聴竹居倶楽部の活動（2）

竹中工務店設計本部
聴竹居倶楽部代表理事
日本建築美術工芸協会法人会員
松隈　章

■地元と一体となった生きた活用へ

1928年に竣工した「聴竹居」は、1938年に藤井厚二が亡くなったあとも竹中工務店が取得することになるまでは藤井家が所有し続けてきた。1952年に藤井家が引っ越したのちは長らく借家として使われてきたが、水廻りを含め大きな改造はされなかった。借家人が居なくなり空家になった2008年春、大山崎町の有志と共に聴竹居倶楽部を結成し、「聴竹居」を藤井家から私が個人的に賃借し公開することにした。当時は建築界でもその存在をあまり知られていなかった「聴竹居」。ましてや一般の方々にはなおさらである。そこで、公開・管理体制を整え、ホームページをつくり、予約制で一般公開を始めた。その後、日本全国各地からの見学者が徐々に増え、現在ではその数は国内外から年間約1万人（2018年実績）にも達するようになった。

予約制の見学だけではなく新緑や紅葉に包まれた「聴竹居」を気軽に見ていただこうと始めた「愛でる会」は、多くの方々が訪れる春と秋の恒例行事としてすっかり定着している。さらに、2009年に漆芸作家の「聴竹居との出会い－栗本夏樹展」を2013年に現代アーチストの「河口龍夫展」を開催し、「聴竹居」の空間と現代アートとの対話を愉しむ場としても活用してきた。こうした公開活用を手がけてきた聴竹居倶楽部は、私以外はすべて地元大山崎町の、それも徒歩圏にお住いの方々である。実は、歴史的建造物を保存公開活用していくうえで、この「地元第一主義」が一番重要だからだ。いくら著名な有識者が評価しようが、地域愛（シビックプライド）として地元の方々が心の底から愛着を持ち続けない限り地域に根差した建物を次世代に遺すことは難しい。

■個人から企業の所有への転換と国の重要文化財指定

「聴竹居」も個人所有のままでは相続税や固定資産税、建物維持管理費などを負担し世代を越えて維持して行くことは極めて困難だ。そこで、2016年末に土地建物の所有を個人（藤井家）から企業（竹中工務店）へと転換し、日常維持管理と公開活動を地域住民が中心の一般社団法人聴竹居倶楽部が行う持続可能な保存活用体制を構築していくことになった。

そして竹中工務店は、取得後すぐに国の重要文化財指定に向けて動き、2017年7月指定を受け、国の助言や補助を得ながら「聴竹居」を国民的財産として未来永劫遺していくことにした。かつて藤井が在籍しそのDNAを持ち2019年に創立120周年を迎えた総合建設会社の竹中工務店が、重要文化財「聴竹居」を所有し地元・大山崎町と一体となって保存公開する。そうした活動を通じて歴史的建築物を遺し使い続けるためのノウハウや知識・技術を蓄積し社会へ還元すると共に建築文化の醸成と発信に取り組んでいく。それは、経営理念「最良の作品を世に遺し、社会に貢献する」を掲げ、設計施工一貫を標榜し建築専業で建物創りを脈々と続けてきた竹中工務店の社会的責任であり矜持と言えるだろう。

■2018年に発生したふたつの天災で大きな被害を受けた「本屋」と「閑室」

1928年の竣工以来、天災による大きな被害を受けることなく静かに佇んでいた「聴竹居」を2018年に大きな天災が2度にわたって襲い掛かった。6月の大阪北部地震と9月の台風21号である。

2018年6月18日朝7時58分に発生したマグニチュード6.1、

2019 年 4 月 27 日 _ 聴竹居新緑を愛でる会 2019

2019 年 4 月 27 日 _ 聴竹居新緑を愛でる会 2019

建第2665号
重要文化財指定書
聴竹居（旧藤井厚二自邸）
右を重要文化財に指定する
平成29年7月31日
文部科学大臣 松野博

建第 2665 号・重要文化財指定書・聴竹居
（旧藤井厚二自邸）

最大震度6弱の揺れとなった高槻市を震源とする大阪北部地震は、大阪管区気象台が観測を始めてから初めてとなる大きな地震だった。高槻市に程近い大山崎町もかつて経験したことの無い震度5強の激しい揺れに遭遇した。「聴竹居」では、今まで割れたことが無かった縁側のコーナーサッシュのガラスが割れ、外壁の土壁が一部崩れる被害に見舞われた。しかし、藤井が耐震性を考慮して地盤の良い土地を選び、平屋で屋根を軽くし、建物のコーナーを造り付けの家具などで補強したことなどが、結果として被害を最小限に抑えていた。幸いなことに建物本体の構造体に大きな損傷はなく、一時中断した一般見学も2週間後の7月1日には再開することが出来た。

一方、2018年9月4日に関西地方を襲った巨大な台風21号は、25年ぶりの非常に強い台風で、京都や大阪を含む西日本各地に最大風速（秒速）44メートル以上の強風と大雨をもたらし、京都府内の多くの社寺仏閣で倒木などの大きな被害をもたらした。「聴竹居」でも、建物そのものへの被害は少なかったものの、大きく育ったモミジの大木の枝の多くが折れ、緑に包まれた「聴竹居」を代表する景観が損なわれる大きな被害となった。

このふたつの天災の中での幸いは、被災直後、それぞれ自宅の安全確認を終えた地元のスタッフの多くがその日のうちに徒歩で「聴竹居」に駆けつけ、写真による被災状況の記録と連絡、割れたガラスの処理等の片付けをしてくれたことである。非常時の対応の成否は平時の取り組みが大切だとは良く言われることだが、図らずも「聴竹居」は地元のスタッフによる日常的な取り組みが生かされたのである。

■歴史的建造物は動かないからこそ地域に根ざし繋がれる
ー聴竹居倶楽部

偶然にも出会った「聴竹居」に1996年以来関わってきて今想うことは、ひとつの歴史的建造物の持つ可能性の大きさだ。私も「聴竹居」に出会わなければ、大山崎町を訪れることも無かっただろうし、地域の方々との交流も生まれえなかっただろう。さらに「聴竹居」を通じて藤井厚二の「日本の住宅」と言う思想に触れることも出来たし、日本の住まいの歴史、日本における建築の在り方、日本人の自然との付き合い方などにも想いを馳せることにも繋がった。大山崎町の方々にとっても、きっと同じようなことを感じただろうし、何よりも「聴竹居」の存在によって大山崎を誇らしく思うシビックプライド醸成の一助になったと思う。最近では「聴竹居」のご近所の方々が時間を見つけて立ち寄っておしゃべりする姿も日常的な風景で、まさに「聴竹居」が、地元第一主義の象徴＝地域のコミュニティセンターになってきている。

あたりまえのことだが、歴史的建造物は移築でもしない限りは動かない。だからこそ、実物が遺っていれば、地域に根ざした存在であり続けて行くことが可能となる。日本人の消費行動が「モノ」消費から「コト」消費へ、さらに、近年では、再生不可能な時間や空間を共有する、あるいは本物のライブ（生）を共有する「トキ」消費になってきたと言われている。少子高齢化、人口減少の時代を迎え、特に今年のコロナ禍に遭遇している現代日本において、地域に遺る歴史的建造物を地元第一主義で世代を越えて遺し活用していくことが、地域の持つレジリエンス（しなやかな強さ）を伸ばしていくことに繋がるのだろう。

2018年６月18日　大阪北部地震で被災した「聴竹居」

2018年９月４日　台風21号によりずれ落ちた屋根瓦

ドローンによる大山崎町の谷田地区周辺空撮

母校を訪ねて

東京大学

株式会社 日本設計
日本建築美術工芸協会法人会員
山下博満 *,***

わが母校の東京大学は現在、本郷・駒場・柏の３つのキャンパスを主軸とする３極構造を構成しています。私自身はこれら３つとも経験したので、その順番に照会します。

●駒場キャンパス

入学すると全員がここで２年間の教養過程を過ごします。科類ごと第二外国語ごとのクラス分けで、私は54S Ⅰ 20組（ゴーヨンエスイチニジュックミ）。昭和54年入学、理科一類の第20組、ドイツ語選択のクラスでした。

駒場Ⅰキャンパスは京王電鉄井の頭線の駒場東大前駅東大口の目の前。正門から北に向かう軸線上に教養学部１号館の時計台が象徴的に聳えています。旧制第一高等学校の本館だった建築で、他の多くの建築とともに設計は内田祥三 *・清水幸重 *、いわゆる内田ゴシック様式です。その向こうはキャンパスの骨格軸をなす銀杏並木で、東の突き当りには今は無き駒場寮がありました。銀杏並木を西に行けば端にはテニスコートがあり、私はあまり熱心な部員ではありませんでしたが、週に何度か軟式テニス部の練習をしていました。練習後はテニスコートから南に降りて坂下門を出て、「満留賀」の冷やしたぬきそばで空腹を満たして家路につくのが常でした。2010年代になってからテニス部の同期会をするようになり、またこの店に行く機会が増えていたので、2020年夏ついに閉店となったのは残念なことでした。今では「バーチャル満留賀」と称したZoom同期会が月２回のペース（！）で開催されています。

教養課程２年目の途中、同期入学生は全員同時に、学部と学科を決める進学選択（通称「進振り」）があります。私は工学部建築学科に進むことに決め、広部達也 * 先生の図学の授業を駒場で受けることとなりました。平行定規や烏口を使っていた時代の話です。

駒場キャンパスから少し西側には、駒場リサーチキャンパス（駒場Ⅱキャンパス）があります。こちらにも内田祥三設計の建築がいくつか残っています。2001年に六本木の現国立新美術館のある場所から移転した生産技術研究所（生産研）は原広司 * ＋アトリエ・ファイ建築研究所によるもので、建築学科同級生でここの設計も担当した生産研の曲渕英邦 * 教授にご案内いただいたことを思い出します。

●本郷キャンパス

３年生からは工学部のある本郷キャンパスに通いました。本郷と言えば、赤門や三四郎池、そして正門からまっすぐ続く銀杏並木と正面に構える安田講堂はその歴史も含めて知られていると思います。駒場キャンパスの風景をさらにスケールアップ・グレードアップしたように感じられるこの並木の象徴性にも劣らぬ立派な銀杏の木が、建築学科の目の前にあります。この大銀杏を中心に据えた広場の軸線上にシンメトリーに建つ工学部１号館。関東大震災の後に完成した現在の建築は内田祥三の設計です。ここは本郷における工学部発祥の地で、1888（明治21）年に旧工科大学本館が建ちました。中央に銀杏の植えられた大きな中庭があったそうです。設計は建築学科（工部省工学寮、後の工部大学校）第一期生の辰野金吾 *。震災後の内田祥三による計画で１号館前の広場中央に移植されたこの大銀杏は、今でもキャンパス内工学部地区のシンボルとなっています。ちなみに、工学部の前身である工部大学校が工科大学となってこの地に移る前は、現在の霞が関三丁目南地区にあり、今でも霞テラスの一角に工部大学校碑が建っています。

工学部１号館の内部は、正面から向かって左半分が土木工学科（現社会基盤学科）、右半分が建築学科と真っ二つに分かれています。建築学科に通った２年間は、設計製図や卒業設計で製図室に泊まり込む日々を送りました。当時の設計計画関連の指導陣（教授・助教授・助手）は、槇文彦 *、香山壽夫 *、

本郷 _ 安田講堂に向かう銀杏並木

本郷 _ 安田講堂

本郷 _ 工学部１号館前の大銀杏

鈴木成文 *、高橋鷹志 *、栗生明、大野秀敏 *、西出和彦 *、長澤泰 *、講師は、林雅子、菊竹清訓、谷口吉生という布陣でした。一方で設計計画以外の先生方（内田祥哉 *、鈴木博之 *、安岡正人 *、松尾陽 *、鎌田元康 *、青山博之 *、神田順 * など）の授業をまともに聞いていなかったことが今でも悔やまれます。1 号館では 1996（平成 8）年に、建築学科側の光庭を屋内化して製図室と図書室を拡充する増改修が、香山先生の設計で行われていて、建築学科で一学年後輩の千葉学 * 現教授も計画に携わったと聞いています。大学院で香山研に進んだ同級生の三谷徹 * は、昨年の夏に建築学科の教授になったようです。

1962 年に、建築学科と土木工学科が共同して申請した都市工学科が発足していました。その当時から都市計画分野と衛生工学分野があり、前者の教官は、日笠端 *、川上秀光 *、丹下健三 *、大谷幸夫 *、本城和彦 *、下総薫 *、高山英華 *、伊藤滋 *、井上孝 ***、新谷洋二 *** という錚々たるメンバーでした。私は建築学科を卒業後、大学院ではこの都市工学を専攻しました。都市工学科は 1 号館の東隣の工学部 8 号館で、私が所属した都市設計の大谷幸夫・渡邉定夫 * 研究室は 7 階にあり、渡邉先生の部屋の扉には「丹下名誉教授室」というプレートが残っていて、研究室の図面棚に、黒川紀章 * や磯崎新 * のサインのある図面がころがっていたのには驚きました。当時先生に連れられて時々行った、ちゃんこ鍋の店「浅瀬川」は、少し場所を移転しましたが今も本郷にあり、その味と安さは健在です。最近も渡邉先生を囲む都市工研究室のプチ同窓会をこの店で開きました。一学年後輩の、出口敦 ****（現在、東京大学大学院新領域創成科学研究科教授）や、山梨知彦 *****（現在、日建設計常務執行役員）も集まり楽しいひとときを過ごしました。都市工卒の大先輩には、大西隆 ***（前学術会議議長）、八束はじめ ***、後輩には、山形浩生 *** などがいます。

私の卒業後も本郷キャンパスには、槇文彦 *、香山壽夫 *、安藤忠雄 *、隈研吾 * などの設計で新しい建築が建てられています。

●柏キャンパス

つくばエキスプレスの柏の葉キャンパス駅を降りると、駅前広場に面して柏の葉駅前キャンパスがあります。キャンパスと言っても「東京大学柏の葉キャンパス駅前サテライト」という 1 棟の建物です。その前からシャトルバスに乗って 10 分ほどのところに柏キャンパスがあります。このキャンパスは、プロムナードのある帯状広場を主軸とし、この軸と平行な東西に長いゾーンが南北方向に層状に連なる並行配置の構造となっていて、この構造が駒場や本郷とは異なる近代的な景観をつくり出しています。この帯状広場の西端近くにある大学院新領域創成科学研究科「環境棟」（設計は日本設計）は平面が S 字型をした建築で、私はここで数年前から非常勤講師をしているのですが、今年度はリモート授業となったため、キャンパスにはまだ一度も行っていません。

今はどこの大学でもコロナ禍で試行錯誤されているのではないかと思いますが、やがてその中からより良い大学の新たなあり方が見つけ出されて、それぞれのキャンパスの歴史に重ねながら、次世代の大学キャンパスに生まれ変わって行くのかもしれません。

*）東京大学建築学科卒
**）他大学卒、東京大学建築学科修士課程修了
***）東京大学土木工学科卒
****）東京大学都市工学科卒
*****）他大学 / 他学科卒、東京大学都市工学科修士課程修了

※各キャンパスの現状や歴史については東京大学のホームページを、本郷キャンパスについては『東京大学本郷キャンパス 140 年の歴史をたどる』（東京大学キャンパス計画室編 2018 年 6 月 東京大学出版会）を参考にさせていただきました。

本郷 _ 大銀杏と工学部 1 号館

柏の葉キャンパス駅前サテライト

柏キャンパス _ 新領域環境棟
© 川澄・小林研二写真事務所

法人会員の設計事務所を訪ねて

株式会社山下設計 Part1

広報委員会

本シリーズの第2回目は株式会社山下設計をご紹介します。

本号の Part1 では山下設計の創設者である山下寿郎氏にフォーカスします。

山下寿郎氏

山下寿郎

山下寿郎氏は明治 21 年 4 月 2 日生まれ。父親を早くに亡くし、叔父の山下源太郎氏に学費などの援助を受けていました。この山下源太郎氏は後に海軍大将になった人物で、その影響を受けた山下寿郎氏は海軍士官学校への入学を志しました。2 回の試験とも身長不足のため不合格になるも、海軍への志は断ちがたく造船官になろうと一高の二部へ進学しました。氏が建築へ進む契機はこの一高時代に巡ってきました。ボート部の先輩が氏の挿絵を見てその絵心を認め建築を勧めたことがきっかけでした。

明治 45 年、東京帝国大学建築学科を卒業した山下寿郎氏は三菱合資会社地所部に就職します。この就職を勧めたのは伊藤忠太です。官庁を志望していた氏に「法科出の役人が上席に座る役所は止めろ。ちょうど三菱地所部から話があるからそっちへ行った方がいい。」ということで三菱地所部に入りました。三菱地所部で氏は設計と構造計算を担当しましたが、この時氏のその後の人生に大きな影響を与えることになる 4 ヵ月間の渡米の機会を得ます。

大正 6 年（1917 年）アメリカが第一次世界大戦に参戦した年に氏は渡米しました。

氏の渡米の目的はオフィスビルの視察と調査でした。当時のアメリカはいわゆるスカイスクレーパーの時代です。第一次世界大戦に参戦したアメリカは国民の団結と限られた資材の有効活用を必要としていました。建設の分野でいうと、発注者と施工者の信頼を再構築し、建設経済を安定させる必要にせまられていました。不安の最大の原因は物価が極めて不安定であったということです。この不安をなくすため当時アメリカでは「コスト・プラス・フィ契約制度」が用いられていました。この制度はあらかじめ工事の総予算を決定し契約するのではなく、ある期間内にかかった金額（実費）をまず計上し、それに適切な報酬を加算して支払うもので、一式で契約した場合に比べ事務手続きは極めて煩雑になり、建設会社が工法の工夫や工期の短縮といった努力によって利益を得る余地がなくなります。しかしかかった費用は確実に支払われ、建設会社も物価の動向にそれほど神経質にならずに済むということになります。でも実際には大変な管理の手間と煩雑な作業を要する制度のため、よほどの不安がない限り一式請負の方が施主・建設会社の両者にとって好ましいのですが、当時は手間がかかってもこの方式を選択する方が安全なくらい経済が不安定であったということです。こうした制度を氏はアメリカで体験してきたわけです。

また、当時フラー社社長の子息の設計事務所に勤めている日本人を尋ねた際、フラー社が日本に進出する意向を持っていることを知り、帰国後丸ビルをフラー社に依頼することにしました。氏がアメリカで見聞した「コスト・プラス・フィ契約制度」を丸ビルの契約に採用したわけです。

丸ビルは建設中に東京大地震に見舞われ、翌年関東大震災が発生します。当時フラー社は日本が地震国であることは認識しており、ニューヨークで 10 階以上の建物に適用していた風圧計算を丸ビルに適用し多少の補強はしていたようですが、設計途中で不安を感じた氏が自ら構造計算を行い補強対策のレポートをまとめました。しかしフラー社の設計のまま

太洋商会ビル _1931 竣工

着工してしまったため氏の指揮のもと補強工事が始まり、この時の補強が翌年の関東大震災時に丸ビルを倒壊から救うことになりました。

震災前後の日本はアメリカの建設会社が進出する時期に重なっていました。氏は地震国という特殊事情の中で、渡米経験を活かし外来制度の実践者として活躍しました。またこの時期（大正 9 年）から昭和 23 年まで、母校で施工の講義もしています。「施工は実務である。教えるためには知識だけでは駄目な分野である。しかも、技術は日々進歩する。絶えず現場を見聞し参加しているものでなければ説得力のある講義はできない。デザインを職能の頂点とし、現場（施工）をそれよりも下位に置く考え方ではとてもいい講義にはならない。」氏が建築を決してデザインを中心において考えていたわけではないことがここに窺えます。氏にとって建築はもっと大きなもので、デザインは部分に過ぎなかったという姿勢が終生一貫していました。

山下寿郎氏は昭和 3 年、自ら設計事務所を設立します。処女作は「太洋商会ビル」です。この建物は未だ現存しています。初期のスタッフには戸塚端氏、今井孟雄氏などがおられました。戦後、一時事務所は閉鎖状態になりましたが、昭和 22 年丸ノ内の三菱 12 号館で再開され、この頃所員は約 30 名程です。その後、佐久間町に移転した昭和 35 年ごろには所員 100 名程に増加しました。氏は戦後、建築家としての設計活動よりも公的な活動に重点を置いていました。したがって戦後事務所では、所員に設計の指導をする姿は見られなかったようです。

山下事務所の設計に極めて個性的なカラーを感じ取るのは困難で、むしろデザインカラーの不在が山下事務所のカラーであるといった方が事実に近く、このことは氏が所員の自主性に対して寛大であったことを示す重要な点といえます。氏は、個性的な作品をモノとして残すより、むしろ人を育てることに尽力されました。事務所の中には設計に夢中になる人から、学会活動に取り組む人まで様々だったようで、多様な人間が一堂に会して共存しているのが戦後の山下設計事務所の姿でした。このようなことが可能になるには事務所への安定した設計依頼が必要で、それを支えていたのは氏の人柄によるところが大きかったといえます。

昭和 40 年代の初めに山下事務所は営業部を設置し、設計受注の維持に努め組織事務所への転換に入りました。八丁堀時代には 200 人の所員を抱えるまでに成長しています。そして、昭和 42 年に山下事務所から一部グループが分離することになり、現在の日本設計が誕生するわけです。規模的には事務所を半分に分割するような事態ですから氏は大変悩まれたそうです。

現在、山下設計と日本設計のスタッフを合計すると約 1,500 人にもなり、これは大変な規模であり、そしてそのどちらも氏の志を受け継いでいます。

山下事務所からは実に多くの建築家、建築研究者が育っています。大学の研究室ではなく民間の事務所がこうした人材を育成した例は決して多くありません。

山下寿郎氏の生き方からは「デザインは建築の部分に過ぎない」というはっきりとした認識が感じられます。

（田島一宏）

霞ヶ関ビルディング _1968 年竣工

NHK 放送センター総合整備 _1972 年竣工

法人会員の企業活動を訪ねて

株式会社クマヒラ

広報委員会

日本建築美術工芸協会に○年に入会された株式会社クマヒラは、明治31年(1898)1月29日、熊平源蔵が弱冠16歳7ヵ月で、広島市天神町に当時全国的なシェアを持っていた東京の金庫メーカー竹内金庫と代理店契約を結び、金庫の販売・修理を主業務とする熊平商店を創業したことに始まります。当初は国内の金庫メーカーと契約を結び、その製品を個人や企業に売る販売店でした。創業9年目には朝鮮・中国・満州に進出して販売店、工場を建設し成長しました。そして昭和13年（1938）に熊平商店広島工場を建設。昭和18年（1943）に広島工場を独立させて、株式会社熊平製作所を設立し、メーカーとして本格的な生産活動を開始しました。昭和21年（1946）には、日本銀行広島支店から十数台の鋼製保管庫を受注し、さらに金庫製造を再開して業績を伸ばしていきました。

昭和40年以降は国際競争市場に参入し、アメリカで好評を得たこともあり輸出額は急速に増大していきました。昭和41年（1966）には、新しく建設される日本銀行本店の金庫設備全般を一括して受注。さらに大阪支店の新築工事についても金庫設備全般を一括受注し「金庫のクマヒラ」の名を不動のものとし、世界最大級の金庫メーカーへと成長していきました。そして昭和59年（1984）には熊平商店は株式会社クマヒラに社名変更されました。

平成30年（2018）には創業120周年を迎えられ、現在クマヒラグループは、販売・サービスを担当する「クマヒラ」と製品の開発・製造を担う「熊平製作所」を中心に構成されています。

「人々の財産や情報を守る」トータルセキュリティ企業

クマヒラは、平成6年（1994）6月から顧客のセキュリティニーズにあったシステムの提案から開発、設計、見積、発注手配、検証、機器設置、設定調整、引き渡し説明、保守サービスなどの全ての業務を行う「トータルセキュリティ事業」を展開されています。

製品は、まずクマヒラの原点である「金融機関向け設備」として、防盗金庫・耐火金庫、貸金庫設備、金庫室・書庫室設備、「特殊扉」として防水扉・水密扉、遮蔽扉、防御扉、気密扉などを製造・販売し、「文化財保存設備」として収蔵庫設備、収納設備、展示設備、保存環境維持管理などを手掛けられています。さらに「セキュリティシステム」として入退室管理システム、セキュリティゲート、鍵管理システム、監視カメラシステム、セキュリティキャビネット、隠匿物検知システムなどのシステムの構築からメンテナンス・サービスによって人々の財産や情報を守っています。また「空間デザイン・プランニング」として建物の内装やレイアウトのプランニングはもちろん、建屋の設計監理まで行い、オフィス空間のデザインとセキュリティソリューションの構築、空間デザイン、プロジェクトマネジメント、金融店舗戦略サポートなど幅広い事業を展開されています。

文化財、美術・工芸品を護るクマヒラの技術

クマヒラの製品と技術は多くの美術館・博物館でも幅広く活躍しています。作品・資料の保管・保存をメインとした収蔵庫設備、展示物を守りながら見せる展示エリアの構築、さらには職員の管理負担軽減や安全確保のためのセキュリティの導入など、作品・資料だけでなく、人・施設全体を守るためのソリューションを提供されています。また文化財保存設備では、火災や盗難などの被害、温湿度変化や汚染物質による劣化リスクから文化財を守る収蔵庫設備、多種多様な文化財を効率よく安全に収納する収納設備、鑑賞性と安全性を両立させた展示設備や文化財にとって適切な保存環境を維持するための保存環境維持管理など、クマヒラの技術が文化財を護っています。

クマヒラの収蔵庫扉、収蔵庫内装、収蔵什器、展示ケースは、近代以降の日本の建築文化に関連する貴重な資料を

明治42年頃の製品

国産第1号丸形金庫扉（昭和29年）

特殊扉：スイング式放射線遮蔽扉

集めた国立近現代建築資料館（東京都文京区）、世界遺産・元離宮二条城の障壁画を展示する二条城障壁画 展示収蔵館（京都府京都市）、平等院（京都府宇治市）の多くの国宝を納めた平等院鳳翔館（京都府宇治市、2001年開館、栗生明設計）など国内の多くの美術館・博物館に納入されています。また、昨年5月にリノベーションオープンし、今年1月に開催されたaaca建物視察会でも訪れました青木淳・西澤徹夫設計の京都市京セラ美術館（京都府京都市）、アイヌ民族の文化の発信と継承、国民理解促進の拠点として昨年7月にオープンした国立アイヌ民族博物館（北海道白老町）、昨年9月にオープンし、国宝・重要文化財を収蔵・展示する室生寺の寶物殿（奈良県宇陀市）などで文化財、美術・工芸品を護っています。

クマヒラの文化事業　創刊90年を迎えた「抜萃のつゞり」

「抜萃のつゞり」は、書籍や雑誌、新聞から心に残るエッセイやコラムを抜粋しまとめたもので、毎年1回、創業記念日である1月29日に発行され、全国の官公庁や金融機関を始め、地方自治体、教育機関、一般企業、商工会議所、一般の愛読者など約8万8千箇所に無料で配布されています。この「抜萃のつゞり」は、読書家であり、また熱心な教育者でもあった創業者熊平源蔵が社会への感謝、報恩のため昭和6年（1931）に創刊されました。

熊平源蔵は明治14年（1881）に広島市に生まれ、幼名を為蔵と名付けられました。他に6人の兄弟がいましたが、いずれも幼いうちに病魔に襲われ、生き残ったのは源蔵ただひとりでした。両親は小間物のほか、数名の職人をおいてキセルやかんざしの製造販売を生業としており、商売熱心で店は大いに繁盛していました。しかし、源蔵が8歳の時、母親が他界してしまいます。高等小学校を卒業した源蔵は商業学校への進学を希望していましたが、当時広島市内には商業学校がなく、父親は地元から離れた尾道市へ息子を手放すことに忍びなく、それを許しませんでした。生来の勉強好きであった源蔵は、進学をあきらめた後も暇さえあれば私塾に通い漢学の素養を身に付け、広島簿記学校へも通いました。しかし、時代は日清戦争後の不況に入り、父親が体調を崩し間もなく店を閉めてしまいます。独立を決意した源蔵は、わずか16歳で熊平商店を創業しましたが、若すぎたために処世上の経験不足を気にし、常に糧になるものを求めていました。それが日々の読書でした。源蔵は身近な新聞、雑誌、書籍から心に残った文章をスクラップして記録していました。一方で、「このようなすばらしい文章を自分だけで独り占めするのはもったいない。ぜひ日頃お世話になっている方々に紹介したい」との思いから創刊された「抜萃のつゞり」は、当初の発行部数は3000部で、友人や取引先に配られ、事業が広がるにつれ、発行部数は徐々に増えて現在は45万部となっています。戦争中は一時中断したものの今日に至るまで毎年発行が続けられ、今年の1月創刊90年を迎えました。この「抜萃のつゞり」は、公益社団法人企業メセナ協議会より芸術・文化支援による豊かな社会づくりの取り組みとして、昨年の「THIS IS MECENAT 2020」に認定されました。

また、熊平源蔵は、教育に情熱を注ぎ、旧制広島高等学校（現広島大学総合科学部の前身）の誘致に私財を投じ、勤労学生への資金援助など、人材育成に貢献してきました。創業者の遺志を継いだクマヒラは、昭和59年（1984）、広島の大学で勉強している外国人留学生への奨学金支給を目的とした「財団法人熊平奨学会」を設立。平成18年（2006）には広島の文化発展に貢献する目的で「財団法人熊平奨学文化財団」に名称を変更し広島県内の留学生と文化事業を中心に援助を続けるなど文化活動を継続されています。

出典：社史「クマヒラの百二十年」

（飯田郷介）

展示施設の入退館ゲート

文化財収蔵庫設備

抜萃のつゞり

第 29 回 AACA 賞受賞者のつどい開催報告

表彰委員会委員長　可児才介

全く予期しなかった「コロナウィルス」に襲われて、混乱の１年でした。当初６月と９月に予定した「AACA 賞受賞者紹介のつどい」は取敢えずいったん中止することを余儀なくされました。その後岡本会長の判断で秋には実施することが決まりましたが、最終判断をすることになっていた８月初旬になってもコロナの勢いはとどまるところを知らず、秋の対面での開催は疑問視されるに至りました。協議の結果、AACA としても初めてのオンライン開催を決断しました。すでにその時点でコロナ禍でのミーティングツール、ZOOM の利用はかなり普及していました。そこで表彰委員会では、専門家がいないため法人会員の一社に支援を依頼して、手探りで準備を始めたのです。ZOOM の普及とともに Peatix というイベントの集客課金ツールも多く使われるようになってきました。結果 Peatix で募集、ZOOM Webinar で配信することが決まりました。会場にも 20 ～ 30 人の会員が集まりましたが、残念ながら本来の目玉イベントである交流会は実施できませんでした。

第１回は９月 14 日に行われました。初めてのオンライン配信で、数回にわたって予行演習を行い、常に発生する問題に、都度解決しながらの準備でした。当日は、それでもいくつかのトラブルに見舞われ、やや時間が伸びてはしまったものの、素晴らしいプレゼンテーションは好評でした。オンラインで視聴された方からは一部の音声が聞き取れないなどの指摘を頂き、第２回に向けて課題となりました。

最初に登場したのは AACA 賞を受賞した山下秀之さんです。個性あふれる新鮮な作品をエネルギー全開で、作品の隅々まで紹介していただきました。優秀賞の堀越ふみ江さんチームからは木造の大型空間の作品が、同じく優秀賞の垣田博之さんからは消防署から地域施設へのコンバージョン作品がそれぞれ紹介されました。奨励賞の須部恭浩さんチームは三角形の大型キャンパスを紹介しました。いずれも力作ぞろいで、見ごたえがありました。

第２回は 10 月 27 日に開催しました。さすがに２回目では試行錯誤の成果が出てオンライン配信は上々の出来でした。最初に登場したのは芦原義信賞を受賞した末光弘和さんチームで、ユニークなゼロエネルギー住宅をご披露いただきました。優秀賞の水越英一郎さんには自然豊かな広場の下に大型体育館があるキャンパス施設のお話をいただきました。奨励賞の三井嶺さんからはユニークな鋳物による構造材を使った店舗の改修計画、同じく奨励賞の中藤さんは工芸品のような銀座のビルを紹介していただきました。今回で２回目の美術工芸賞は大谷弘明さんチームの建物のファサードデザインが受賞しました。時間とともに美しく変化する映像などが紹介されました。

オンライン講演は今後の新しい形を示唆しています。ネット上では新宿も鹿児島も札幌も等距離の関係になります。つまり東京の地域イベントだったものが、全国イベントになる可能性を秘めていると言えます。そんな展開にも期待したいと考えています。

第１回 AACA 賞受賞者のつどい

第２回 AACA 賞受賞者のつどい

■ 第30回 日本建築美術工芸協会賞 受賞作品

AACA 賞

「京都市立美術館（通称京都市京セラ美術館）」

作　者：青木淳　（青木淳建築計画事務所 / 基本設計・実施設計監修・工事監修）
西澤徹夫（西澤徹夫建築事務所 / 基本設計・実施設計監修・工事監修）
森本貞一（株式会社松村組 / 実施設計）
久保　岳（株式会社昭和設計 / 実施設計）
高橋匠太（株式会社高橋匠太 / ファサード照明）
所在地：京都府京都市左京区岡崎円勝寺町 124

（撮影　阿部太一）

芦原義信賞

「CHRONOS DWELL」

作　者：藤森雅彦
所在地：広島県広島市安佐南区大町東

AACA 優秀賞

「のだのこども園」

作　者：水上哲也
所在地：千葉県野田市蕃昌　338-2

AACA 優秀賞

「尼崎パーキングエリア」

作　者：納谷建築設計事務所 / 納谷学、納谷新
所在地：兵庫県尼崎市南城内地先

AACA 奨励賞

「松山大学　文京キャンパス myu terrace」

作　者：株式会社日建設計
勝山太郎、多喜茂、甲斐圭介
所在地：愛媛県松山市文京町 4 番 2、10

AACA 奨励賞

「木頭の家」

作　者：坂東幸輔建築設計事務所　坂東幸輔・藤野真史
なわけんジム　名和研二
所在地：徳島県那賀郡那珂町

美術工芸賞

「HOTEL STRATA NAHA」

作　者：富山晃一（全体統括）
中原典人・湯川ちひろ・友口理央・佐々木絢子・小泉智史・
藤田はるひ〔UDA〕　渡瀬育馬・内海大空〔Dugout〕
長堂嘉範・伊波和哉〔デザインスタジオ琉球楽団〕
所在地：沖縄県那覇市牧志 1-19-8

AACA 優秀賞

「垂井町役場」

作　者：株式会社梓設計
永廣正邦、日比淳、森一広、簾藤麻木
所在地：岐阜県不破郡垂井町宮代　2957-11

AACA 奨励賞

「松原市民松原図書館」

作　者：高野洋平・森田祥子
所在地：大阪府松原市田井城 3-1-46

AACA 奨励賞

「すばる保育園」

作　者：藤村龍宇至 /RFA +　林田俊二 /CFA
所在地：福岡県小郡市大保 960

AACA 特別賞

「熊本城特別見学通路」

作　者：株式会社日本設計　塚川譲・堀駿
所在地：熊本県熊本市中央区本丸地内

AACA 美術工芸賞奨励賞

「東新工業（株）いわき工場アートプロジェクト」

作　者：『チーム：アート★よつくら』
川辺晃、中村茂幸、大隅秀雄、吉田重信、平山健雄、根岸創
藤城光、久野彩子、青山ひろゆき、久木哲夫
所在地：福島県いわき市四倉町字栗木 192-5

事務局だより

■新入会員・会員の移動　（令和2年10月～令和3年2月）

個人情報保護法の定めにより、個人会員は氏名・活動分野
法人会員は会社名・担当者氏名・会社住所を記載します。

《新入会員》

個人会員	田上竜也・井上　剛・藤森雅彦・坂東幸輔・高野洋平・川辺　晃・水上哲也・納谷　学・安齋好太郎

《会員の変更》

個人会員	神　よしこ（スペースデザイン）	住所変更	転居の為
	丸山祐音雲（書）	住所変更	転居の為
	常松欽治（造形）	住所変更	転居の為
	鈴木　聡（建築）	住所変更	転居の為
法人会員	（株）東芝インフラシステムズ	担当者変更	東　一徳（前任　高橋繁範）
	（株）フッコー	住所変更	〒153-0041 目黒区駒場 4-6-2　Y-5　701
	（株）LIXIL	住所変更	〒136-8535 江東区大島 2-1-1

ー 訃　報 ー　心からお悔やみ申し上げます。

丸山十志郎　会員　10 月 13 日ご逝去　平成 30 年 4 月入会

令和２年度　実施される事業

文化事業委員会主催シンポジウム「地域とデザイン」	3 月 25 日（木）15 時～　梓設計　AZS ホール	（会場･オンライン参加）
第 4 回 aaca サロン「現代のライフスタイルと伝統工芸のブランディングプロジェクト」	4 月 21 日（水）17 時～　リリカラ東京ショウルーム（オンライン参加のみ）	

令和２年度　コロナ拡大のため中止の事業

第 15 回 aaca 京都地区建物視察会

編集後記

新年あけましておめでとうございます。新型コロナウイルスの感染拡大による非常事態宣言が再度発令され不安な日々が続きますが、自粛生活の中、皆様は如何お過ごしでしょうか。企業活動にもテレワークなどにより出社の約７割減が要請される中、協会でもオンラインによる委員会運営が行われ始め、広報委員会でもオンラインによる委員会を開催しました。

コロナ禍によりアートの世界、美術館の運営にも厳しい状況が続き、作家の皆様にとっても制作活動や作品発表がままならない中、会報 89 号には「コロナ禍でのアート・国際交流としての個展」、「建築空間のアートを探る aaca 展」、「ポストコロナ時代のギャラリー～これからの役割」や二人展など多くの「会員活動レポート」をいただき、作家の皆様方のコロナ禍に負けない旺盛な制作活動の一端をご紹介することができました。

自粛生活が長引く中、会員の皆様方からのお元気な様子を是非お寄せください。（飯田郷介）

aaca 2021.3 no.89

発行人　会長 岡本 賢
発　行　一般社団法人 日本建築美術工芸協会
〒108-0014
東京都港区芝 5-26-20　建築会館 6 階
TEL　03-3457-7998　FAX　03-3457-1598
URL　http://www.aacajp.com
E-Mail　info@aacajp.com

編　集　広報委員会
委員長　飯田郷介
副委員長　野口真理　田島一宏
委員　五十嵐通代　石田眞人　置鮎早智枝
工藤康博　竹生田 正　中村弘子
松本治子　三上紀子　森田高年
山﨑和子　山崎輝子　山下治子
吉田　誠
編集制作協力　株式会社 アム・プロモーション